

1. 活動報告（事務局 記）

6月1日（日）グリーンセーバーの試験と田植え準備がかさなって12名の参加でしたが餅田の代掻きの準備のため畦草刈等完了しました。

6月7日（土）今年も湿地ゾーンの植生調査を行いました。山大の学生さんと会員合わせて約30人の参加です。昨年、行っているのに要領は解ります、でも植物の名前は解りません。なんだかビオトープのボランティアだと植物の名前ぐらい直ぐに出て来るのだらうと思われている、それはまったくの勘違いです。とにかく調べるのに時間が、かかる作業です。

6月14日（土）ビオトープの田植えも3年目を迎える事が出来ました。朝のうち降っていた雨も田植えの始まる頃には上がり、笑い声いっぱいの田植えはどんどん進んでいきました。途中、尻もちをついたり、泥んこになって植えている子供も多かったです、この笑顔が肥やしに大きく育つと良いですね。（参加者約100人）

6月14日（土）きららネットの子供エコクラブの子供21名とスタッフの方が、ビオトープで自然観察を行われました。原副会長と西原会員が対応されました。

6月20日（金）ちびっ子の集い ときわ湖水ホールにてパネル展示 田村、原田

6月21日（土）10：00～12：00 山口県環境生活部との環境行政討議 今井、吉本、西原、潮村、藤村、田村、原田参加

6月21日（土）第3回目を迎えた里山自然観察隊、今回のテーマは「昆虫」です。さあ、虫取り網を持って出発だ！（隊員20名）

2. 今後の予定（事務局 記）

見学者

7月5日（土）厚狭郡山陽町立厚陽小学校1年生 遠入先生他十数名

7月24日（木）下松市農業委員会 松本さん他ご一行 案内役 原田マ他

行事

7月6日（日）参集日（草原の草刈他）終了後飲み会を計画

7月24日（木）藤山婦人カルチャーセンタにて 里山ビオトープについて講演 講師未定

7月15日ごろ予定 中電宇部事務所によるボランティア草刈有り

3. ビオトープ関連（見学者の感想）（ファミリーサポートセンター 内田 廣子 記）

ふるさとを思う 里山ビオトープ二俣瀬にて

“ふるさとは遠くにありて思うもの……”とは、昔覚えた詩のいっ節。 両親もなくなり、いまは唯、家だけが残っているふるさと二俣瀬を遠くに思うようになって、どのくらいの年月が過ぎただろうか。 先日（五月十八日、日曜日）宇部ファミリーサポートの地域交流会が、里山ビオトープ二俣瀬で開催された。サポートのB会員である私も、当日交流会に参加させてもらい、里山ビオトープ二俣瀬で楽しい一日を過ごさせていただき、いたく感激した。 と、いうのも、ビオトープのある場所は、ん十年昔の私の散歩コースの一路であったからだ。 今、ビオトープの出来ている谷合いは、だんだん畑が奥へ奥へと伸びていて、ここを流れる須賀河内川は、青く澄んでとうとうとして、ヤマメやハヤ等生き物も多く住んでいた。 里山では、春には若葉が輝やき、夏にはホタルも飛び、秋になると赤く色づいたハゼの葉が山を飾り、やがて冬になると、土手の上では枯草が霜の布団を着て真っ白になって向えてくれていた。 季節はいつも同じように繰り返すだけのように見えても、それはそれはのどかでよい場所であった。 いつの頃からか、人が田畑に足を向けることが少なくなってきた時、谷合いの田や畑、回りの里山も生命の輝やきを失ってしまい、荒涼とした原野に変わっていったようだ。私の心もふるさと二俣瀬から離れてゆき、遠くに感じるようになっていった。 そんな中で、時代も変わってきて、里山の大切さを思い、里山の姿を昔に戻そうという運動が地域の中から始まり、多くの方々の知恵と力が集まり、里山再生へと向けて努力が始まっていった。 そして、二俣瀬の里山が、名前も新たに、里山ビオトープ二俣瀬として、見事に出来上がったのが平成十三年の春のこと。 里山には、人の心を包み込んでくれる暖かい空気があり、幼い日の思いをよみがえらせてくれる不思議な空間がある。 私の思いの地が、ビオトープとして生れ変わったのは嬉しい限りではあるが“でも”と私は思ってしまった。再生は大切なことであるが、再生も過ぎると、自然破壊と同じことになってしまうので、必要以上に人の手を入れないで欲しいと……。 父や母がいなくても、二俣瀬は私のふるさとだと、交流会の日ビオトープにあって強く思いなおした一日だった。 この里山ビオトープ二俣瀬を軸にして、いつまでも輝やいて欲しいふるさとである。

4. ビオトープ関連（連載ビオトープ近辺の案内）

“珍説フタマタセ その九、海軍さん（1）”

（車地 吉富 壮介 記）

かって車地に「海軍さん」と称されたご仁がおった。明治30年生まれ、一生を車地ですごしたが、若いころ海軍を志願し、巡洋艦に乗っていた、と。大正の末、病気で退役、その内結婚、馴れない給料とりになった。当時は軍国調華やかで、徴兵検査より志願がもてた時代、バルチック艦隊を潰滅させた帝国海軍といえば、飛ぶ鳥を落とす勢い。そんな海軍を志願したとあっては海軍様さま、当人も海軍様気どりだった。六尺豊か、十八貫、チョビ髭はやし、偉風堂々と他を押し、正に風格満点、ひとは「海軍さ

ん」と呼んでいた。事件がおきた。昭和12年春、海軍さんは三十台後半、まだまだ血気盛んだった。前夜から降り続いた雨は、田植え前の水田を潤し、百姓は忙しげに歩き回っていた。厚東川の真ん中にある中島へ、老人が朝から牛をつれ、しろがきへ行った。「昼になっても戻らん...」と、娘が呼びに行こうとして驚いた。川が増水、渡るじゃ戻るじゃどころか、濁流が渦を巻いていた。娘は懸命に呼んだが応えはない。走(かけ)って戻り、飛びこんだところが「海軍さん」の家。「おとさんが流される、助けておくれ！」海軍さん昼飯を食っていた。「よし、助けちゃろう！」食べかけの飯をお茶で流しこみ、ねじり鉢巻き、シャツに褌、ゴムぞうりが出ていった。その姿は、娘のいう「ホント後光(ごこう)がさして見えた」と。雨はこやみなく降り、濁流は湯気をたてて逆まいていた。海軍さんは大股で上流側へ行き、笹をおし分けて川へ入った。「ええかの？大丈夫かの？」気づかう娘を後に、抜手をきって泳ぎ出した。が、その勇姿は忽ち濁流にのまれた。「海軍さん！海軍さん！」悲鳴に似た声は川面にひびいた。二度三度頭が見え、遙か流された頃、えっとこさ対岸にとりつき、藪の中へ消えた。娘は川土手へ座りこみ、動けなかった。牛を立木につなぎ、爺さんつれて川岸へ戻った海軍さん「はて...」と困った。上流から泳ごうにも、島には上流がない。往きとちがい帰りは爺さんがおる。どれ程泳げるか...老人つれてこの濁流...。海軍さん、腰にロープを巻き、片方を爺さんに持たせ「わしが泳ぐから、この綱もってついておいで」爺さん青ざめて「世話あない、世話ない」と震えている。悲劇は娘の目の前で起きた。二人は忽ち流され、視界から消えた。娘は悲鳴、絶叫と共に近くの家へ飛びこんだ。車地中に戦慄が走った。(つづく)

5. 会員の声

○ 氷点下 水車も全身 凍りつき 重さに耐えて 行きつ戻りつ

今年の寒波で水車や導水管の下に多数の氷柱(つらら)がぶら下がった。特に1月6日のつららは最長1m28cm。30日は前日の日中も氷点下で、当日朝は氷点下5.5度だったので1m60cmまで成長し、私の身長と同じ位だった。直径は測ってないが10cm位あったろうか。導水管の下には大小数十本、水車のつららは数えきれない程。また水車全体が厚い氷で覆われてバランスを失い、回転せずに行ったり来たりしていた。こうした光景は近所近辺ではちょっと見れない見事なものであろう。嘘と思う人は市民センターの職員に確認を。写真もあるが実物とは比べ様もない。つららの姿形も様々である。水面に達したつららの先端は丸くて大きい。水車の心棒あたりは回転のためか同じ方向に規則正しく曲がり、導水管の下は太くて長く、風に吹かれて斜めに伸びたものもある。池から湿地帯に水が落ちる場所は、木や草に出来たつららの表情も千差万別で面白い。私は写真の趣味がないので子供の写真もほとんど撮ってない。しかしピオトープの湿地帯でモグラが泳いでいるのを初めて見たりするとカメラがあったらなあと思う事はたびたびあった。そこで意を決して昨年末にデジカメを購入。初撮影が説明書を持参しての1月30日。プリントしてもらった中の一枚に人の手の形をしたつららの写真あり。珍しいので何気なく撮った写真だが、注意して見ると、5本の指が水車の手前にあり、その場面の下に「危険ですから水車をさわらないで下さい」との立て看板が写っている。手と水車と看板の位置関係と内容が、その気で写したのではないが、すばらしいと自画自賛。一週間位新聞社に持参しようかと悩んだが、歯医者行きを機に持参した。採用されるかどうかもわからずその新聞も購読してないのでそのままにしていた。所用で市民センターへ行くと新聞で見たとの事で探してもらって見ると、持参したその日の夕刊に掲載されている。しかも一面に。これは予定を変更し無理に載せてもらったのではないかと思いつつも感激。記念に引き伸ばして額に入れて飾ろうと思いつつも、まだそのままにしている私である。(林 弘之 記)

ホタルー1 「竜王山のヒメボタル」 (美濃和 信孝 記)

きょう(6月5日)は2回目の観察に行きました。1日に比べると、ヒメボタルはかなり少なくなっていました。1日の夜が何といってもすごかったです。斜面一杯に数百の光が同調して光るさまは、「電飾ホタル」という名が似つかわしいかもしれません。1日にすばらしく光っていた紅葉谷中間の東屋の上の斜面には、今日はほとんどいなくて、紅葉谷の下流部が中心でした。5月24日には、上の尾根筋に多かったという情報も合わせて考えると、どうもヒメボタルの発生時期は、山の上から始めて山をくだるのではないかと、というのが今日考えついた私の仮説です。メスは羽がありませんから、そんなに移動できないので、メスが羽化したところにオスも集まるはずですが、メスの羽化は、山の尾根から始めて、順次下に下っていくのではないのでしょうか。それはなぜか？ 私にはとてもわかりそうにないので記憶の片隅に留めておくことにします。いつかわかる日がくるかもしれません。もう一つ、ヒメボタルはある程度人の手が入った2次的自然の林が好みなのではないか、ということに気がきました。低木が刈られて、ある程度下層の空間が空いた場所でないと、光が届かないので繁殖には不都合になります。オスが飛びまわられるだけの空間があり、かつ餌のオカチョウジガイなどの陸貝が育つだけの落ち葉・枯草のある場所というのがヒメボタルにとっては最も好適な繁殖場所ではないのでしょうか。かつてのヒメボタルの生息域がどうだったのか知らないのですが、里山管理の停止がヒメボタルの生息場所を狭めているという可能性もあります。人間の近くにいる、こんなに感動を与えてくれる虫たちが将来もずっと生息していける環境づくりをしていかななくてはならないと思いました。

ホタルー2 (大村 美智子 記)

話題のほたるを、5月31日に観に行きました。まず、5月にメールを見て知った竜王山のヒメボタルです。台風の直後で、実際に行けるのか、どうかも分からないまま参加しましたが、三十人位の人とワゴン車に分乗して、容易く赤崎登山口まで、行きました。登山口から暫らくは、まだ風もあり ほんの明るくて、蛍は 数える程度でした。でも帰りは いつの間にか 風も収まり 真っ暗になった中、蛍の多さは、眼を見張るものがありました。金色に強く点滅し、少しオーバーに言えば、山全体が クリスマスツリーに成った様でした。すっかり、昔を思い出し 6月4日の夜は、一の坂川の、蛍を観に行きました。県庁前を通り、上野小路交差点を左折して 木町橋から五重塔へと行きます。五重塔手前の市営の広い駐車場に車を留めてから、ライトアップされた五重塔を見ながら、少し昔を偲びました。それから、歩いて少し戻り、木町橋から 一の坂川沿いに見物です。一ツ

橋、伊勢橋から、見るゲンジボタルは、やさしく 尾を引くような光り方で、幻想的でした。数も、数年前にがっかりした程 居なかつたのに比べると、来て良かったと 心から思える程 増えていました。でも、ン十年前の子供の頃を思い出すと、まだまだです。帰りは、二俣瀬にも寄りました。 見慣れたはずの景色も、ただ暗くて 奥までは、とても入れませんでした。蛍が数匹 大きく飛んでいました。どこのホタルも、其処のほたるらしく、その雰囲気に見事に合って 居るものだと思います。一緒に行った松本さん同様に、今年はホタルの当たり年でした。

ホタルー3 (西原 一誠 記)

6月1日と2日の夕方、小野田の竜王山にホタルを 見に行きました。山頂近くの大きな駐車場に車を止め、もみじ谷 に降りて行くと、たくさんのヒメボタルが光っていました。東屋では 湿地があるため、ゲンジボタルが数匹飛んで光っていました。ゲンジボタルは、ピカーー・ピカーーと長く光りますが、ヒメボタルは ピカピカとまるで点滅しているようです。ゲンジボタルは15mmから19mmくらいの長さですが、ヒメボタルは5mmから9mmくらいでとても小さいです。メスは飛べませんし、オスもせいぜい1~2mの高さまでしか飛べません。ゲンジボタルは4~5mの高さも飛べるのに比べるとまったく違った昆虫に思えてしまいます。5月24日にも行ったのですが、小雨のため数十匹でしたが、今回は台風一過で天気も良く条件は良かったようです。3日は二俣瀬のピオトープへホタルを見に行きました。昨年と比べて少し少ないように思いました。水車の下の小川の周りはヘイケボタルが数匹確認出来ました。長さ10mm前後で背中模様は縦に一筋の線でした。ゲンジボタルは十文字の模様ですが、多分須賀河内川の上を飛んでいるやつがそうだと思うのですが、確認は出来ませんでした。林弘之さんに会ったので、聞いたところ、今日は少し涼しいので少ないと言われました。昔はヒメボタルもいたそうで、今でも数は少ないがいます。餌は、ゲンジボタルはカワナで、ヘイケボタルはヒメモノアラガイ・サカマキガイ・カワナなどの巻貝のほかマルタニシ・ヒメタニシ・インドヒラマキガイなども捕食する、ヒメボタルはオカチョウガイやベッコウマイマイなどの陸生の巻貝です。ホタルは甲虫の仲間、ホタル科の昆虫は、世界では約2,000種、日本では40種以上います。成虫が発光するものは、意外に少なく十数種に過ぎない。そのうち、夜光るものは4種で、沖縄のオオシマドボタルを除くと、ゲンジ・ヘイケ・ヒメの3種である。また、幼虫が水生であるものは、世界で5種程度である。よってゲンジとヘイケは珍しいホタルです。水の豊かな日本ならでの現象でしょう。これからも、いろんな種類の昆虫も増えてくるといいなと思います。

6. 来訪者の声 (東屋のノートより一部抜粋)

今回はありません。

7. 会よりの連絡事項

吉富壮介さんのご逝去にあたって

吉富さんは、ねっからの二俣瀬っ子、車地っ子で会報の1号から23号に至るピオトープ周辺の案内を記載されてきました。二俣瀬、車地地区の昔話や、言い伝えを方言たっぷりに紹介頂きまして厚くお礼を申し上げます。20号、21号は病院から原稿を送っていただき、22号~23号は再入院される前送っていただきました。さらに24号には遺稿となる原稿を頂いています。

一時退院された今年の春に、炭焼きや椎茸菌打ちつくりで一生懸命に働いておられたことが目に浮かびます。ピオトープでは草刈には天才的なものがあり、ずいぶんと参集日以外に御願ひして刈っていただきました。又焼肉パーティでは趣味の狩猟で捕えた猪肉を奮発されたことも忘れる事は出来ません。

会員として全く惜しい人をなくし残念でなりません。ただご冥福を祈るのみです。

事務局 原田

8. 編集後記

今年の田植えは、梅雨らしい天気の中での作業となりました。この調子でぐずついた日が続けば、去年のような水不足にはならないでしょう。そうなるよう願っています。さて、田植えの後半は、朝鮮初中級学校(名前が違っていれば、ご容赦ください)の皆さんに手伝ってもらいました。慣れてくると、女の子はおしゃべりしながらも、作業を続けていました。しかし、男の子は案の定、田植えの列から離れて泥遊びです。私のすんでいる町内の子供会の廃品回収でも、毎回同じ光景が見られます。民族は違っても、子供たちの生態は同じようです。つくづく、そう思いました。この様な行事は、参加する子供たちにとってよい経験になるとともに、私たち大人にも勉強になります。朝鮮初中級学校の皆さん、ありがとうございました。最後に会員の関根先生、最初から最後まで田植えをなされていたようですが、日曜日、腰は大丈夫だったでしょうか。私は、日曜日は腰が痛くて、ゆっくり休養しました。(前田 歳朗 記)